

学習者の動機付けを高め、学習ストラテジーを効果的に活用

— するための Web 教材 — 過去数年の成果と問題点 — *

小磯 かをる(大阪商業大学)

1. 始めに

インターネットの普及によりネット上の共通言語である英語の運用能力の必要性が以前にもまして求められる一方、英語嫌いの学生も数多くいる。大学 1,2 年を対象に筆者が行ったアンケート調査でも、1998 年には 166 人中 41 名が、1999 年には 176 人中 43 名が「英語が嫌い」もしくは「英語が大嫌い」と答えている。嫌いになった要因としては、主として、「授業内容が難しくてついていけない」という学習内容に関する要因、「予習・復習を怠った」という学習者自身の要因、「担当教員が嫌いだった」という担当教員に関する要因がある。そして、これらの要因が様々に影響し合い、いわゆる「英語嫌い」の学生を生み出している。しかしながら、同アンケートによって英語嫌いの学生の多くが「英語は将来必要だ」と思っていることも同時に明らかになった。「英語は嫌いだけれども、将来的には必要だからできれば英語を習得したい」という学生像が浮かび上がった。このような現実を前に、英語嫌いの学生の学習意欲を刺激し、少しでも英語嫌いの学生をなくすことは英語担当教員の責務であり、学習者の学習意欲を刺激し、学習成果をあげさせるには、動機付けを高め、学習ストラテジー(習得のための技法)を効果的に活用するのが不可欠であると考えられる。

これらの観点から筆者等は Web 上に英語自主教材を構築した。Web 教材導入の理由としては(1)98 年と 99 年の調査で「英語が好きだ」と回答した学生は 4 割以下なのに対し「コンピュータに興味がある」と回答した学生は 7 割以上であったこと。つまり、学生のコンピュータに対する興味を利用して、学習者の動機付けを高めようと思ったこと、(2)従来の一斉授業では、能力・興味が多岐にわたっている学生のニーズに対応するのが困難であること、(3)1995 年頃からマルチメディア教材・インターネットの有効性についての論文や発表が数多くなされてきたこと、(4)筆者の勤務校で学内 LAN の整備・環境が整ったこと、(5)情報科目担当教員の支援が得られたこと、があげられる。本稿はいかに Web 教材が英語学習の動機付けと学習ストラテジーに影響を与えることができるかを考察する。まず、次節では動機付けと学習ストラテジーの定義について考察し、第 3 節では 1998 年から 2000 年までの Web 教材の試行とその成果についてそれぞれ分析する。第 4 節では成果について総括するとともに、最後に第 5 節で今後の課題について論じる。

2. 動機付けと学習ストラテジー

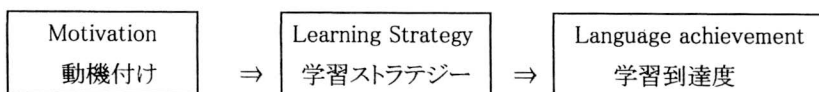
語学学習に動機付けが果たす役割は非常に大きく、学習に対する学習者の動機付けが高ければ高いほど、学習者は学習に積極的に取り組み、成功度が高いといわれている。また学習ストラテジーを効果的に活用することは学習を能率的に進めるためには不可欠である。

Dörnyei は Learning Strategy を “as examples of motivated learning behavior”ⁱⁱ と捉えている。学習者個人が持っている Motivation が学習行為のなかで、現れてきたものが Learning Strategy であるといえよう。それ故、Motivation は Learning Strategy に一番強い影響を与える要因である。(1)強い Motivation を持っている学習者は動機付けが弱い学習者より、より多くの Strategy を使うこと、(2)多くの Strategy を使う学習者は学習到達度が高いことは、先行研究で明らかになっている。

iii

これを図にすると以下のようになる。

図1. 動機付けと学習ストラテジー



このように動機付けと学習ストラテジーは密接な関係があり、共に作用し合い学習到達度を高める。Web 教材は動機付けと学習ストラテジーの両方に好影響を与えることによって、学習到達度を高めることが期待されるのである。

2.1. 動機付け

動機付けの分類の仕方は研究者によってさまざまであるが^{iv}、動機付けを学習者の要因で捉えると(1)年齢・精神的発達・性別等に関わる「生物学的領域」(2)IQ や言語適正に関わる「認知領域」(3)自我や性格特性に関わる「情意的領域」に分けられる。

この内、生物学的領域と認知的領域に存する要因は、生得的なものや学習者の社会環境の影響を大きく受けている要因が多く、変えることが困難であるが、情意的要因は学習者・学習指導者がそれを認識することによって、比較的容易に変えることができ、それによって学習効果が高まることが期待できる。この情意的領域の中には、学習者の学習に対する「不安」・「興味」が含まれている。そしてこの「不安」・「興味」が学習者の学習態度・学習習得度に大きな影響を及ぼすことは先行研究によって明らかになっている。^vそして今回の Web 教材は動機付けの情意的領域の「不安」・「興味」に特に有効であると期待される。

2.2. 学習ストラテジー

学習ストラテジーとは学習者がその言語を習得するために使うさまざまな技法のことであり、レベッカ・オックスフォードの定義によると、学習ストラテジーとは、学習をより易しく、より早く、より楽しく、

より自主的に、より効果的に行うために、そして新しい学習状況に素早く対処するために学習者がとる具体的な行動である。^{vi} 学習戦略の分類も研究者によって異なるが図2が示すように主として4つに分類できる。

図 2. 学習戦略の分類

認知学習戦略(cognitive leaning strategy) 第一言語の適応、スキミング、スキヤニング、演繹的推論、記憶、 文脈判断、練習など
メタ認知学習戦略(metacognitive learning strategy) 計画、モニターリング、予習など
社会的学習戦略(social learning strategy) 他者との学習、質問、他者への感情移入など
情意的学習戦略(affective learning strategy) 不安の軽減、勇気づけ、感情のコントロール

認知学習戦略とは、学習者が第二言語習得において、学習者自身が使用する特定の学習法のことで、記憶や推量、第一言語への変換などさまざまな戦略である。メタ認知とは認知を越えているという意味で、メタ認知学習戦略とは学習者が自らの認識力を調整し、認知学習戦略を効率的に使用する学習戦略で、学習計画、予習などがある。社会的学習戦略は学習者同士の理解を高め、他者とのコミュニケーション能力習得には不可欠な学習戦略である。情意的学習戦略は、学習に影響を及ぼす学習者が持っている不安や学習者の性格に関わる領域の学習戦略である。そして今回の Web 教材はこの4つの学習戦略の活用が期待される。

3. Web 教材の試行

筆者は大阪商業大学において情報科目教員の樽磨和幸氏の協力のもと1998年、1999年、2000年に、学生の要望と前年度の成果と問題点を踏まえ Web 教材を構築した。本節では最初に、これらの教材の個々の構成と、動機付け・学習戦略の観点からの成果を年ごとに述べ、最後にこれら3つの教材がいかに学習者の動機付けを高め、学習戦略を効果的に活用するのに貢献したかを論じる。

3.1. 1998年のホームページ型英語自主教材の導入

3.1.1. 教材の構成と特色^{vii}

教材として、reading、writing、listening、grammar それぞれについて試験形式の問題を複数用意した。学生の英語の能力には個人差がかなりあると予想されたので、すべての問題を Level 1(英語検定 3 級程度)と Level 2(英語検定 2 級、準 2 級程度)に区分して作成した。さらに教材提供後、学生からの要望に答えて、より簡単な Level 0 を追加した。内容は HTML で作成し、writing の解答は記入式で、その他はいずれも選択式(4択)とした。解答時のヒントの提示や結果の判定

は、JavaScript を用いたプログラミングにより実現した。なお、解答者自身が選択問題の正解を確認することも可能であり、CGI を用いて学習の履歴が記録されるようになっている。いずれの教材も利用方法が統一されており、学習者に対して特別な知識や技能を要求しないユーザー・フレンドリーなものとなっている。

この教材の特色としては、Web 上のホームページ型教材であるということである。ホームページ型教材は時間的制約がない(いつでも)、場所的制約がない(どこでも:WWW サーバ上に載せれば学外からでもアクセス可能)という長所を持っている反面、大きな欠点も持っている。学生はコンピュータ画面に向き合って学習するのだから、そこに教師が介在する場所は生まれてこない。教師が学生の顔を見ながら行うフェース・トゥ・フェースの授業とは異なり、ホームページ型教材では学生の反応が見られないということが致命的な欠点である。つまり、ホームページ型教材は教材の一方的な提示のみに終わるといふ危険性をはらんでいる。そこで、この欠点を補うため、電子掲示板機能が活用された。学生は教材に対する意見や要望を電子掲示板に書き込む。担当教員はこれらに対するレスポンスを書き込むとともに、学生の要望に沿うように教材内容を追加更新する。また教師に対する教材への要望だけでなく、学生同士によるチャットの場を提供する機能も備えている。このような掲示板機能の利用により、一方通行になりがちなホームページ型教材に学生対教師および学生対学生のインタラクティブな側面を持たせるようにした。

3.1.2. 成果

この教材の動機付けからみた成果としては、情意的領域の主な要因である「学習者の不安の軽減」と「学習者の興味を刺激する」ことがあげられる。学習者は他者と比較されることがなく、自分の能力に合った教材を自分のペースで学習できるので、「先生に叱られる」とか「恥を掻く」という恐れから生じる学習不安がかなり軽減される。また新しいメディアに対する興味が学習の興味へと移行する学習者もいると期待される。同様に学習ストラテジーの情意的領域に存する「不安軽減のストラテジー」や「勇気づけのストラテジー」もこの教材を使うことによってうまく活用できる。

3.2. 1999 年の Web 文法掲示板の導入

1998 年の教材を1年間試行したのち学生にアンケートを実施したところ6割以上の学生がこの教材に好意的であることが判明した。また掲示板利用により学生の参加意識が芽生えやる気が起こることも明らかになった。同時に学生の英語嫌いの原因として、文法をあげた学生が8割以上にも達することが判明した。そこで、文法はすべての言語において必要不可欠なものであり、コミュニケーションの手段であって目的ではないということを学生に認知させるために、自分の意見を伝える手段としての文法の役割に焦点を当てて、1999 年に Web 文法掲示板を導入した。

3.2.1. 文法掲示板の構成と特色ⁱⁱⁱ⁾

文法掲示板は以下の 3 部から構成されている。

- ① 文法事項を解説するために独自に作成したホームページ

② 学習した文法事項を使って英文を書き込むための掲示板システム(文法掲示板)

③ 自由に意見や質問を述べるための掲示板システム

文法事項の解説においては、中学、高校で学習した項目を中心に、英語運用能力に最低限必要だと思われる項目のうち、学習者が特につまずきやすい「比較級」、「仮定法」、「関係代名詞」、「分詞」、「受動態」、「不定詞」、「時制」の 7 項目を選んだ。

いずれの文法項目においても、文法嫌いの学生の負担にならないことを考慮して、説明はできるだけ簡単にとどめた。また、学習者の興味と集中力を持続させることを目的として、解説文中に簡単な例題と確認テストを設けた。確認テストでは、所定個所をクリックすることで解答が即座に得られるようになっている。

学習者は、各文法事項を学習した後、その文法事項を利用して英文を作成し、文法掲示板に投稿する。作成する英文は、気軽に書き込めることを第 1 目的とし、短いセンテンスでよいこととした。また、その内容に関しては、自分が言いたいこと、自分が好きな歌や映画のセリフなどをテーマとすることとし、その際、そのテーマを選んだ理由を記述することを義務づけた。なお、学習者への負担を軽減するため、理由の記述は英語であることを強制せず、日本語でもよいとした。教師または学習者は、投稿された英文に対して誤りを指摘したり、感想を返しながら会話を展開したりしていく仕組みになっている。学習者は基本的な文法事項を学んだ後、自分の意見、感情を積極的に発信する(図3参照)。このようにして学習者に対して文法というものは机上の飾りものではなく、自分の言いたいことを伝えるために不可欠な道具だと認識させる、つまり知識のための文法を脱却してコミュニケーションアプローチによる文法学習の実現を目指した。

図 3. 文法掲示板投稿例

-
- ☆比較級(Iさんの投稿) It's better to regret something you did than something you didn't do. 僕の好きなロック・バンドの歌詞の中で一番好きな部分を抜き出しました。僕もこうあれたらと思います。
- ☆Re:比較級(Kさん) What is the name of the band ?
- ☆Re:比較級(Iさん) Red Hot Chili Peppers というバンドの歌詞でバンド名を略してレッチリといます。現在、このバンドは世界最強と言われており、若者に大変人気で、6月9日に新譜がでたばかりです。一度聞かれてみれば？(One Hot Minuteより抜粋)
- ☆Re:比較級(Aさん) おかげで友達が欲がっていた CD が分かりました。感謝です。どうもありがとうございます。
- ☆Re:比較級(Nさん) ぼくもレッチリ好きです。Californication の“Around the world”だったかな？なんしか1曲目がいい感じでした。15曲目なんかもいいとおもいます。
- ☆Re:比較級(Iさん) Californicationは1-6曲目が好きです。なかでも、やはりレッチリらしさが、出てるのは、5曲目の“Get on top”だと思います。富士ロックには、行きますか？
- ☆Re:比較級(Aさん) Californication 買いました。良いですね。感動です。重ね重ねありがとうございます！

3.2.2. 成果

前回と同じように、この教材も「学習者の不安を軽減すること」そして、「学習者の興味を刺激すること」の2点によって動機付けに貢献していると考えられる。「学習者の不安を軽減すること」の理由としては(1)文法掲示板にある程度日本語を使ってよいと指示をしたので、学習者は比較的楽な気持ちで投稿できること、(2)家庭等学外でも投稿できるので、教室の雰囲気にも圧迫感を感じる学生にも負担にならないことがあげられる。また「学習者の興味を刺激すること」の理由としては、(1)自分の意見を英語で表現できる喜びを学習者が得ると言うこと、(2)自分が投稿したものに、他の人のコメントがもらえ、コミュニケーションの楽しさを実感できること、(3)教材作成者にとっても投稿を分析することによって学生の興味の対象がわかり、その興味を掘り上げることによって学生の興味をひく教材を作成できるということがあげられる。¹⁴

3.3. 2000年のデータベース利用のマルチメディア教材の導入

1998年導入の自主学习教材、1999年の文法掲示板システムはあくまで、文字ベースの教材であった。掲示板の投稿から、学生のマルチメディア教材に対する要望が数多く寄せられ、それと同時に自分の進捗状況が知りたいという学生からの要望も何件か寄せられたので、それらの要望に答えて2000年にはデータベースを利用したマルチメディア教材を導入した。

3.3.1. 教材の構成と特色*

この教材は、①ビデオ教材提示部分、②問題提示部分、③ユーザ情報管理部分から構成されている。それぞれを簡単に説明すると以下ようになる。

- ① ビデオ教材提示部分:ビデオ配信システムには、インターネット対応型ビデオオンデマンド(VOD)システムとして、VDO社のVDO Live Serverを用いている。ネットワークライセンスが与えられたビデオ教材“The American History”を、2～3分ごとに分割した合計72トラックをVDOフォーマットにエンコードした後、ビデオサーバに格納している。
- ② 問題提示部分:ビデオの内容に関連した小問をトラックごとに1～4問用意した。問題はすべて4択形式である。各トラックの小問にすべて解答した後、正解を確認することができる。これらの問題と正解のセットは、HTMLコンテンツとして作成し、WWWサーバに格納している。
- ③ ユーザ情報管理部分:この部分は、ユーザ認証データベースと学習履歴データベースで構成されている。データベースサーバには、PostgreSQLを使用し、WWWサーバとデータベースサーバとのインターフェースにはPHPを用いた。ログイン後のユーザセッション管理には、Cookieを利用している。学習者はWWWブラウザを利用して教材サイトにアクセスする。ここでまず、ユーザ名とパスワードによるユーザ認証を受ける(新規利用者はユーザ登録を行う)。目次ページにより希望のビデオ教材を選択し、ビデオを視聴する。このとき、学習者の意思によりビデオの内容をテキストで表示し参照することもできる。ビデオ視聴後、問題に解答

すると同時に成否確認ができる。同時に、学習者ごとの解答結果が学習履歴データベースに自動的に記録されるようになっている。

3.3.2. 成果

動機付けからみた、この教材の成果は主として次の2点である。ひとつは、マルチメディアを利用することによって学習者の好奇心を刺激したこと、つまりビデオ教材を利用することにより、文字・音声・映像など多様なメディアを融合して提示できるので、学習者のより多くの感覚に訴え、学習者の好奇心や関心をひきおこし、動機付けを高めたことである。もうひとつは、データベースを利用することにより、学習不安を軽減したことである。英語学習に不安を感じている学習者にとってテストは精神的な苦痛である。テストの成績が悪かったために英語嫌いになった学習者が多くいる。

従来のテストは学習意欲を促進する好意的な評価ではなく、否定的な評価である場合が多い。否定的な評価を受けることによって学習者は「自分には能力がない」と感じてしまい、無力感が生じ、学習意欲が低下する。この自習学習教材では、学習者は原則的には第三者から評価されないの、「自己を否定される」屈辱感から逃れられる。また一方、学習者が自己の学習履歴を参照することができるので、相対評価でなく絶対評価が得られる。同時に絶対評価だけでは自分の進捗度に不安を感じる学習者は、全体の学習者の中での自分の進捗状況や学習成績が他人に知られることなく簡単にわかる。

4. まとめ

前節で 1998 年から 2000 年にわたって試行してきた Web 教材の構成と成果を個々に述べてきたが、これら3つの教材が、いかに動機付けを高めるのに貢献し、学習ストラテジーの効果的活用に関与するかをまとめてみる。

4.1. 動機付けの観点からみた成果

これら3つの教材は共に学習者の内的要因のうち特に情意的要因である「学習不安の軽減」と「興味の刺激」に有効であった。「学習不安の軽減」に貢献する要因としてはコンピュータ学習の特性である「いつでも」「どこでも」「誰の評価も受けずに」「好きなペースで」などがあげられる。英語嫌いの学生は「決まった時間に」「教師が指導する教室で」「教師の評価を受けながら」「早すぎるペースで」学習することに苦痛を感じている。それゆえこれらの苦痛要因をなくするだけでも学習者、特に英語があまり得意ではない学習者の不安はかなり軽減する。また「興味の刺激」に貢献する要因としては、学生のコンピュータに対する興味、文字・音声・映像など多様なメディアを融合して提示できるマルチメディア教材の利点があげられる。またサーバ等に記録を残すことによって、個々の学習者の学習履歴が明確に残ることも学習者の興味を刺激するのに役立つ。

4.2. 学習ストラテジー活用につながる成果

今回の Web 教材が図2の学習ストラテジーの活用にどのように役立ったか図2の分類にしたがっ

て述べる。

(1) 認知学習ストラテジー(cognitive learning strategy)の活用

個人の能力にあった(特に 1998 年の教材)迅速なフィードバックをともなう教材であったため、認知学習ストラテジーのなかの、記憶、練習のストラテジーの活用に優れていた。

(2) メタ認知学習ストラテジー(metacognitive learning strategy)の活用

時間・場所の制約を受けないため、予習・復習が容易であること、データベースにより学習進捗状態がすぐにわかるので、学習の計画を立てやすいというメリットによりメタ認知学習ストラテジーの活用にも役立つ。

(3) 社会的学習ストラテジー(social learning strategy)の活用

BBS・電子メールを利用することにより(特に 1999 年の教材)、他者との交流・質問が容易になり、社会的学習ストラテジーの活用に役立つ。

(4) 情意的学習ストラテジー (affective learning strategy)の活用

自分のペースで学習ができ、第三者評価を受けないので、不安が軽減され、勇気づけがなされ、感情がコントロールされることによって、情意的学習ストラテジーの活用に役立つ。

5. 今後の課題

前述したように、過去数年間の Web 教材の試行は、学習者の動機付けを高める観点からも、また学習ストラテジーを効果的に活用するという観点からもある程度の成果をあげることができた。各年度末に行ったアンケートからは学習者の好意的な回答が寄せられたが、ただ、実際この試行によって学習者の動機付けがどこまで高まったか、どの学習ストラテジーを使ってどこまで習熟度が伸びたかという定量的データが不足しており、今後の課題としたい。また今回の試行は情報科目担当教員の支援が得られたのでなし得たが、それでも教員の負担は大変なものであり、語学教員が一人で Web 教材を作成・管理するのは、莫大な時間とエネルギーが必要になる。今後学習者の要望にさらに迅速に答え、さらにきめ細かい教材を構築するには教材作成アシスタント等の人的支援が不可欠である。この教員の負担の軽減という問題は、これからますます盛んになると予測される e-learning においても最重要課題のひとつになることは間違いない。専門的なコンピュータ知識を持っている一部の教員だけでなく、すべての教員が使いやすい語学関連のオーサリングソフトは筆者が知っている限りはまだ開発されておらず、誰でも簡単に使用できるオーサリングソフトの開発が待たれている。コンピュータの教育への導入はこれからもますます広がるであろうし、教育メディアとしてのコンピュータは計り知れない可能性を秘めており、特に学習者主体の教育にとって不可欠である。コンピュータはこれからの英語教育において欠くことができないツールであり、積極的な学習環境を形成し、教授者—学生間のコミュニケーションを容易にする。そして、学習者の自立性と発見、学習者同士の共同作業を促進・増幅する媒体である。⁴このようなコンピュータ時代において使いやすいオーサリングソフトと学校等からの人的支援は不可欠である。

最後に、「いつでも」「どこでも」という観点からすると、携帯端末への応用が必要である。最近の学生にとってはメールといえば携帯メールのことであり、携帯端末を使つての BBS も楽しんでいる。

携帯端末には(1)受信できるデータ量が限られている(2)電話代が高い、というネックもあるが、今後の動向としては、教材の携帯端末への提供ということも避けては通れないのではないかとと思われる。

* 本稿は日本英語コミュニケーション学会関西支部研究フォーラム(平成14年4月27日、関西大学)における口頭発表原稿に加筆・修正したものである。

注

-
- i 1998年の調査では、「英語が嫌い」「英語が大嫌い」と回答した学生の6割以上が「英語が将来必要だ」と回答している。
 - ii Dörnyei(1999)参照。
 - iii Dörnyei(1999)やEhrman(1996)等の多くの研究者によって調査されている。
 - iv Gardner and Lambert(1972)は動機付けを「統合的動機付け」(Integrative Motivation: 学習している言語文化に同化したくて学習する気持ち)と「道具的動機付け」(Instrumental Motivation: 仕事のために有利になる等の理由で学習する気持ち)の2つに分類したが、この分類がESLの学習者に基づいた分類であることから、最近では、内的動機付け (Intrinsic Motivation) と外的動機付け (Extrinsic Motivation) に分類する方法がよくとられている。
 - v Ehrman(1996), Rod Ellis (1999a, 1999b) を参照。
 - vi オックスフォード (2000)を参照。
 - vii 教材の構成・特色については、小磯かをる・樽磨和幸(1999)を参照。
 - viii 文法掲示板の構成・特色については、小磯かをる・樽磨和幸(2000)を参照。
 - ix 1999年4月から2000年1月までの文法投稿数は461であり、これをテーマ別に分類すると、一位が音楽関係(投稿数88)であり、二位が友達・家族のこと(同75)、三位はスポーツ関係(同70)であった。
 - x 教材の構成・特色については、小磯かをる・樽磨和幸(2001)を参照。
 - xi 町田(2001)を参照。

参考文献

- Dörnyei, Z., "Moving Language Learning Motivation to a Larger Platform for Theory and Practice" in Oxford, R. L. (ed.) *Language Learning Motivation: Pathways to The New Century*, University of Hawaii, 1999, p.79
- Edmondson, W., *Twelve Lectures On Second Language Acquisition*, Gunter Tubingen, 1999.
- Ehrman, M. E., *Understanding Second Language Learning Difficulties*, SAGE Publications, 1996.
- Ellis, R., *Understanding Second Language Acquisition*, Oxford University Press, 1999a.
- Ellis, R., *Instructed Second Language Acquisition*, Blackwell, 1999b
- Gardner, R.C. and Lambert, W.E., *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*, New Bury House, 1972
- Oxford, R.L., *Language Learning Motivation: Pathways to The New Century*, University of Hawaii Press, 1999.

-
- 安藤昭一編『英語教育現在キーワード辞典』増進堂 1991年。
垣田直巳監修『英語の学習意欲』,大修館 1993年。
ロッド・エリス (金子朝子訳)『第二言語習得序説』研究社 1996年。
レベッカ・オックスフォード (宍戸・伴訳)『言語学習ストレテジー』凡人社 2000年。
小池生夫『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館 1995年。
小磯かをる・樽磨和幸「ホームページ型英語自習教材の開発研究」『大阪商業大学論集』112・113合併号、
1999年。
小磯かをる・樽磨和幸「英文法教育にコミュニカティブアプローチを導入する手段としてのBBSの利用」
『大阪商業大学論集』118号、2000年。
小磯かをる・樽磨和幸「英語嫌いをなくすWeb教材」『大阪商業大学論集』122号、2001年。
小林利宣編『教育臨床心理学中辞典』北大路書房 2000年。
田崎清忠編『現代英語教授法総覧』大修館 1999年。
中田賀之『英語学習モチベーション』リーベル出版 1999年。
藤井健夫『ことばの世界』大阪教育図書 2001年。
町田隆哉他『新しい世代の英語教育』松柏社 2001年。
若き認知心理学者の会『認知心理学者教育を語る』北大路書房 2000年。